

甲状腺外科草子 155 哲人宰相：大平正芳余話⑬

杉野 圭三

大平正芳回想録追想編には著名人の寄稿が多い。



キッシンジャー ライシャワー 橋本龍太郎 田中角栄
ヘンリー・キッシンジャー（元アメリカ国務長官）

彼は常に、慎み深い態度の中に豊かな才能を秘めていた。約束した以上のことを実行するのも常であった。大平氏に対する尊敬の念は、後には敬服へと変わっていった。この賢明で篤実温厚な人物に対し、私は素直な友情を抱き、その盟友たることを誇りとするようになった。

大平氏は、日米欧委員会において流暢な英語で演説を行った。会場を去ろうとする彼を呼びとめると、私は大平氏の英語の演説を聞いて、これまでの私との会談では必要もないのに私の発言を通訳させて、答を考えるための時間かせぎをしていたことが分かった、と冗談を言った。彼はにっこり笑うと、頬を私の肩にすり寄せる仕草をした。われわれの間には暖かい友情が通い合っていた。二人は共通の理念の実現に邁進し、試練の時を分かち合った古兵（ふるつわもの）同士であった。

私の公的生活を通じて、大平氏との交友はもっとも懐かしい思い出、もっとも誇り高い経験となっている。私は感謝の念をこめて大平氏の思い出をいつくしむであろう。

エドウィン・ライシャワー（元駐日アメリカ大使）

大平さんは素朴でけれん味のない人柄で、それだけに多くの人から信頼を寄せられていました。公のことになると、慎重に発言を控えられることが多かったのですが、いつも裏表のまったくなく、率直な方でしたから、大平さんのおっしゃることには全幅の信頼を置いていました。大平さんはすぐれたユーモアの持主でもありました。

1964年に私が精神異常の青年に刺された直後、大平さんは病院に駆けつけてこられ、私が手術を受けていた三時間もの間、家内のそばにつき添って下さったときのことを、家内は今も深く感謝しております。大平さんは常に泰然自若としておられました。少なくとも表面上は。私と一緒にホワイトハウスに赴いて、ケネディ大統領との会見を待っている間、大平さんがコックリコックリされていた姿が目につきます。私は1980年5月に二人で撮った写真を最も大切な宝として大事にしております。この写真の温顔には、大平さんの篤実な人柄とユーモアがあふれていると同時に、大平さんを偉大な人物たらし

めた、筋をまげない剛直さを窺わせるものがあります。私は、大平さんが日本の最もすぐれた首相のひとりであり、急逝さえされなければ、長期にわたり政権を担当されることになったであろう、と確信しております。

橋本龍太郎（第82、83代総理）

「大平のおじさん」と私は呼び、なついていた。目のちいちゃな色の黒い、時々大声で笑う時、大きな前歯が子供心に妙に印象深かった。

厚生省援護局のなかに霊安室がもうけられていることを知る人は少ない。いわんや訪れる人は滅多にない。ここには第二次大戦中の各戦域から集められた戦没者のご遺骨が、千島ヶ淵の戦没者墓苑に納められるまでの間、安置されている。無論援護局の職員が香華をたやさずおまもりしているが、誰もおまいりして下さる方がないことは関係者にとって淋しいことであるのも間違いない。ある日、大平総理に私はこの話をした。瞬間、「よし、僕がまいろう」。

これには私の方が驚いたが、日ならずしてこの話は実現し、大平総理は本当に厚生省を訪ね、霊安室のご遺骨に花を捧げ手を合わさって下さった。半信半疑だった厚生省の職員達も、現実に大平総理の姿を見、本当に喜んだ。帰途につかれる総理の背に、自然に湧いた職員の大きな拍手が贈られたが、このぬくもりと職員一同の感激は厚生省に霊安室が残るかぎり語りつがれ伝えられて行くだろう。

田中角栄（第64、65代総理）

大平君と私の公私両面における兄弟のような間柄は、この時から一層深くなったのである。二十八年の俗に言う「バカヤロー」解散、次いで三十年の鳩山ブーム選挙、三十三年の岸内閣での選挙と続くのであるが、私は毎回のように香川二区の彼の街頭演説などに駆り出されたし、のちに池田内閣で彼が官房長官となり、職掌がら、内閣の留守居役として選挙運動ができなかった時などは、大蔵大臣にあった私が彼の代役のような選挙をした思い出もある。

彼の演説は、宗教大学の学者のような格調は高いが地味で真面目なものであり、街頭演説で大平ブームを捲き起こすようなものではなかった。ある日、夕方のことである。街頭演説用のトラックの上に立っている彼はほこりにまみれて真っ黒い顔であった。

私はその傍に立ってマイクを握った。「諸君、香川県を代表する人材は数多い。弘法大師を頂点に三木武吉しかり、吉田さんに曲学阿世の徒などと言われた東大総長・南原繁もまたその一人であろう。諸君、見給え、車上に立つわが大平正芳君を――まさに生きながらの銅像ではないか。やがて彼は国を代表する国家有為の人材となり、弘法大師にも比肩する四国讃岐の誇りとなるであろう」。その日の夜遅く宿に帰ってきた彼は「まったく驚いたよ。脇の下から冷汗が出た」と、一言つぶやいたのである。

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2025年10月17日